

慶谷壽信先生の学問などについて (5)

吉池孝一 中村雅之

ウェブサイト「古代文字資料館」には現在「長田夏樹学術資料庫」および「豊田五郎学術資料庫」があります。今後、「慶谷壽信学術資料庫」の構築を計画しており、それに先駆け、またそれと歩調をあわせて、慶谷先生の学問などについて短い対談を複数回行い、随時掲載することになりました。

* * * * *

中村：慶谷先生とインド学というテーマについては最後となります。インド学に関係のある著作をもう一度あげると次のようになります。今回は【音訳漢字】に係わる論文を中心に話し合うということですが、あげられたものはすべて歌戈韻と魚虞模韻の古読に関するもので、“論争”ということになっていますね。

【総合】

1978. 10 仏教文化と中国語学

1987. 9 『音韻のはなし —中国音韻学の基本知識—』の訳者注

【反切の起源】

1974. 10 中国音韻學史上の一問題 ——顧炎武の「二合音」について——

1988. 6 反切と仏教文化【「慶谷壽信先生の学問などについて (3)」で公表】

【頭子音の認識】

1980. 3 『玉篇』巻末に附された「五音聲論」について

1981. 10 「字母」という名稱をめぐって

2000. 3 国際音声字母の中国流の受容

【音訳漢字】

1980. 7 歌戈魚虞模の音価をめぐって

1997. 3 歌戈魚虞模古讀論争の概略

1997. 6 歌戈魚虞模古讀論争の学史上の意義

吉池：はい。歌戈魚虞模韻の古読に関する論争の発端ですが、1923年、汪栄宝氏が「歌戈魚虞模古讀考」という論文で問題を提起しました。当時の発音では、麻韻は a、歌戈韻は o、魚虞模韻は u または ü であった。しかし、上古音の枠組みをみると、麻韻は歌戈魚虞模韻と一類になっている。それで、もしも、歌戈魚虞模韻の音価が、上古音でも u または ü であったとするならば、上古音は a のない体系となってしまう。そこで、汪氏は、日本漢字

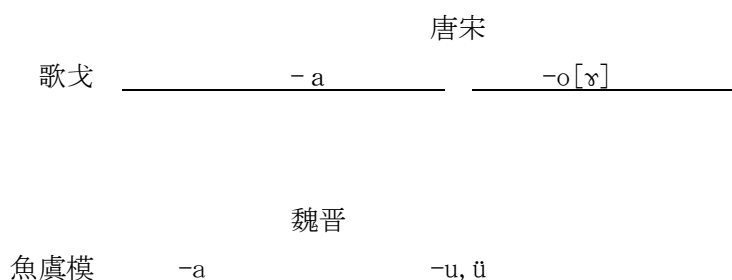
音や Sanskrit の音訳漢字を論拠として、歌戈韻の音価は唐宋以前では a であり、魚虞模韻の音価も魏晉以前では a であった、とするものです¹。

中村:Karlgren 氏が Grammata Serica で上古音を提示したのは 1940 年のことですから、1923 年の汪榮宝氏の提案は斬新ですね。

吉池: はい。この提案は当時そうとうに斬新なものであったようで、大反響をよび、錢玄同、林玉堂、章炳麟、除震、唐鉞氏など、そうそうたる学者が意見を公表し“論争”が巻き起こりました。

中村: 論争の内容については、慶谷先生の「歌戈魚虞模古讀論争の概略」(1997 年)で知ることができるので読んでみました。論争に参加した研究者はそれぞれが自分の意見を主張しますが、根拠に問題のあるものも含まれています。その中で唐鉞氏は冷静に論争をまとめてバランスの良い提案をしており、これによって論争はほぼ収束に向かうようです。ところで、このテーマについては、大学院の慶谷先生の授業で取り上げていましたね。私はあいにく参加していませんが。

吉池: 慶谷先生の「歌戈魚虞模の音価をめぐって」(1980 年)がでてから 5 年後の 1985 年度に大学院の講義で、唐鉞著「歌戈魚虞模古讀管見」(『國故新探』1926 年)を材料としました。そのときのノートによりますと、ご自分の「歌戈魚虞模の音価をめぐって」(1980 年)のコピーを配布したうえで、汪榮宝の説として次の図を板書されました。



中村: 歌戈韻のローマ字 o に付した音声記号の [ɤ] は先生が付されたものですか。

吉池: はい。この音声記号 [ɤ] にかかわる記述は、慶谷先生の論文の中にあります。「歌戈魚虞模の音価をめぐって」(1980 年)の注に「今日、われわれは、ge, ke, he などの韻母が非円唇的な母音 [ɤ] であることを知っているが、当時一般の人人には円唇的な [o] ないしいくぶん円唇的な half open の [ɔ] だと考えられていたらしい。なお、ウェード式では、ko,

¹ 「依余研究之結果，則唐宋以上，凡歌戈韻之字皆讀 a 音，不讀 o 音；魏晉以上，凡魚虞模韻之字亦皆讀 a 音，不讀 u 音或 ü 音也」(241 頁)。

k'ɔ, ho と表記する。」とあります。また、「歌戈魚虞模古讀論争の概略」(1997年)の注にも「拼音の ge, ke, he (ウエード式では, ko, k'ɔ, ho) の韻母は、当時、[ɣ]ではなく、[o] ないしは [ɔ] と考えられていたようである」とあります。非円唇的な[ɣ]を、汪氏をはじめ論争に参加した学者たちが円唇の[o]ないし[ɔ]と考えていた、とはどういうことなのでしょうかね。

中村：慶谷先生の表現を素直に解釈すれば、非円唇的な[ɣ]であるはずの ge, ke, he を当時の学者たちは円唇の[o]ないし[ɔ]と考えており、そのことに慶谷先生はやや困惑を感じていたということになります。これは北京語と南京官話を混同したことから生じる困惑でしょう。最近20年ほどの間に、明清における南京官話の研究は大きく進み、北京語が歌韻の韻母を非円唇[ɣ]とするのに対して、南京官話は円唇の[o]であったという理解が現在では広まっています。慶谷先生が歌戈魚虞模の研究を始めた頃は、まだこの辺りの認識が不十分であったと考えられます

江蘇の人である汪榮宝が共通語として意識していたのは北京語ではなく、南京官話ないしはそれに近い言語だったでしょうから、歌韻の韻母が円唇母音であっても何ら不思議ではありません。19世紀後半になると、南京官話は共通語としての地位を徐々に北京語に譲ることになりますが、それでも20世紀初頭まではかなりの影響力をもっていたようで、1920年代に考案された初期のラテン化新文字でも南京官話風の綴りが随所に見られるほどです。

吉池：南京官話の影響力は予想外に大きいということでしょうか。

中村：そういうことになります。歌戈魚虞模古讀論争に関わった学者たちは軒並み南方の出身ですから、彼らにとって歌戈の母音を「-o」と表記するのはごく自然なことであったと思われます。話が本題から少しそれました。それで、慶谷先生の講義はどのようなものだったのでしょうか。

吉池：授業における検討の中心は、歌戈韻の音価というよりも、魚虞模韻の音価であったとの印象があります。

中村：それは少し意外ですね。「歌戈魚虞模古讀論争の概略」(1997年)によると、「魚虞模も魏晉以前には a であったという提言は、確かに検討すべき問題であるが、本稿では重視しないことにする」として魚虞模韻については肝心の汪榮宝氏の説を省略し、紹介していません。慶谷先生は魚虞模韻が上古で a であったということに関わる論争は重視していないようにみえますが。

吉池：それはおそらく、唐鉞氏の判断と関係しているのでしょうか。魚虞模韻を a とするこ

とについて、汪氏は前漢以降の音訳漢字を用いますがその数は僅かなものです。これについて、唐鉞氏は、音訳漢字の適用範囲を後漢以後、より厳密には魏晉以降であるとしています。そして魏晉以降の音訳漢字に基づいて、六朝時の魚虞模韻の主母音を“開 o” [ɔ] としました。

中村：そもそも、魚虞模韻が魏晉以前は a であったとする論拠として汪氏が用いた音訳漢字とはどのようなものだったのでしょうか。

吉池：授業の折に配布された汪榮宝氏の論文のコピーがあります。それにより、一部を示すと次のようになります。

- ・ Buddha→魏書 釋老志「浮屠」、後漢書襄楷傳「浮圖」。dha→屠、圖。
 - ・ Upāsaka→後漢書 楚王英傳「伊蒲塞」。pā→蒲。
 - ・ Māya→魏略 浮屠經「莫邪」。mā→莫。
 - ・ Pandura→高僧傳 釋道安「賓頭慮」。ra→慮。
 - ・ Sinra→梁書 新羅傳「新盧」。ra→慮。
- など・・・

中村：以上のうち、「浮屠」や「浮圖」については後に、必ずしも梵語形 Buddha の音訳ではなく、パーリ語などの俗語形の音訳である可能性も考慮すべし、という論が出てくることになりますね。

吉池：はい。季羨林氏の「浮屠與佛」（1948年）、周法高氏の「論「浮屠與佛」」（1956年）などですね。授業でも話題になりました。慶谷先生にもう少し時間があつたならば、あるいは魚虞模をめぐる何かをお書きになられたのかもかもしれません。

中村：ところで、慶谷先生はどのような経緯で歌戈魚虞模の論争に関心をよせたのでしょうか。何かきっかけがあつたのではないかと思うのですが。

吉池：これはいまのところ想像なのですが、有坂秀世氏の学問と関係があるのではないかと考えています。有坂秀世著『上代音韻考』（1955年、三省堂）の周代音を論じた古音論の「固部について」に、興味深い記述があります。この固部というのは、大矢透氏の『周代古音考』（1914年）の21韻部の1つで、切韻の模、魚、虞、麻韻などを包摂する部なのですが、この部の解説のなかで有坂氏は次のように書いています。「満田博士（支那音韻斷）大島博士（支那古韻史）はいづれも o の方を原音と見て居られるのであるが、私は寧ろ武内義雄氏（岩波講座日本文學「支那文字學」四五頁）や汪榮寶氏（張世祿氏「中國聲韻學概要」109—110頁に據る）のお説のやうに寧ろ a の方を古音と見るべきであると思ふ。」と

します。次いで有坂氏は、『周代古音考』が後漢の梵音の漢字音訳例によって「漢魏の間に於て、此の部の所屬文字の體韻*を平上去入を通じてア韻に呼びしは明らかなり。而して又同時にオ韻ウ韻に充てたるものも少からざるより思へば、ア、ウ、オいづれとも一定せざりしが如し。」とする説を紹介しつつ、「周代の頃は寧ろ a 類のものであった可能性の方が餘程多いやうに思はれる。」と自説を展開します²。 *體韻、主母音に相当

中村：なるほど、たしかに汪榮宝氏が登場しますね。それはそうとして、汪榮宝氏の「歌戈魚虞模古讀考」（1923年）よりも、大矢透氏の『周代古音考』（1914年）のほうが早いわけですね。しかも音訳漢字を利用するという手法も同じです。

吉池：有坂秀世氏が『上代音韻考』（1955年）の当該部分を書いた時期は、慶谷先生のご研究によると昭和九年一月（1934年）以前ということですので³、これもまた Karlgren 氏の *Grammata Serica*（1940年）以前のこととなります。有坂氏は、Karlgren 氏は中国の研究を低く見ており抗議しなければならない、と述べています⁴。これは主に古音の分部について述べた部分ではありますが、音価についても同様のことを言えるのかもしれませんが。周代から唐代までの魚虞模に係わる分部と音価をめぐって、日本と中国と Karlgren 氏を代表とする欧州の研究は出揃っており、これを研究史として記述したならば興味深いものとなるのではないのでしょうか。

中村：慶谷先生が記述したらどのようなものになったか、想像してみると楽しいですね。先生はご自分の仮説を述べる時には、慎重でしばしば回りくどい表現になり、結果としてかなり分かりにくくなるのですが、一たび研究史を語ると、俄然イキイキとしてきます。特に魚虞模については、Karlgren の *Grammata Serica*（1940年）が中国での論争を無視するように、上古音に -o を想定した訳ですから、このあたりは慶谷先生が研究史を書いていれば、筆の冴えが期待されるどころかなと思います。

吉池：確かに研究史となると筆が冴えわたるという印象がありますね。さて、今回の対談も終盤になりましたが、訂正とお詫びをしなければなりません。第1回の対談のおり、1988年の趙誠著『中国古代韻書』の訳注を付す授業の最後において、インド学に関する手書きの資料「中國語學研究資料としての漢譯佛典 その前論：「佛陀の金口より漢土に至るま

² 『上代音韻考』（1955年、三省堂）326-331頁。

³ 慶谷壽信著『有坂秀世研究 一人と学問一』（2009年、古代文字資料館。第2刷2010年）によると“かくて、少なくとも再入所後から昭和九年一月以前までの六ヶ月余の間に執筆された部分は、二五三ページから七三九ページまで四八〇ページ強である。”（26頁）

⁴ “以上私は、いはば前に引用したカールグレン氏の批評を敷衍して、和漢の古韻學者の研究法の缺點を指摘して來たのであるが、ここに翻つてカールグレン氏に對し、東洋人としての抗議を提出しなければならない。”（309頁）。

で」を配布し講義をされたとしましたが、それは私の記憶違いでした。インド学に関する手書きの資料を配布したのは、今回話題とした1985年度の「歌戈魚虞模古讀管見」の講義の最後です。この資料は、水谷眞成氏が都立大学で講義をされたときのもので⁵、慶谷先生の書き込みがあります。

中村：ところで、本筋からは外れるのですが、慶谷先生の律儀さを示す事例を一つ指摘しておきます。「歌戈魚虞模古讀論争の学史上の意義」（1997年）には、末尾に英文タイトルと英語サマリーが添えられています。そのタイトルは、The Controversy of the Ancient Pronunciation of the Rimes 歌戈魚虞模 and Its Historical Effects となっているのですが、ここで「韻」を意味する「Rimes」の綴りが問題です。

吉池：どういうことですか。

中村：私が院生時代に書いた論文の英語サマリーで「韻書」を「rime dictionary」としたのですが、慶谷先生から「Karlgrenはrhyme dictionaryと綴っています」と言われたことがあります。先生がこのようにいう時、わざわざ「rime」と綴る理由は何だ、という一種の詰問です。私はその時、橋本萬太郎先生の英文の論文を読んでいて、そこに用いられた綴りを拝借したのです。「rime」はアメリカ式の綴りと考えていいでしょう。その慶谷先生が「歌戈魚虞模古讀論争の学史上の意義」（1997）の英文タイトルで「Rimes」という綴りを用いているのですから、そう綴る理由は何だ、と問いかけない訳にはいきません。その理由はおそらく、この論文が『橋本萬太郎紀念中国語学論集』のために書かれたことにあるのでしょう。つまり、「韻」を橋本氏が「rime」と綴ることを知っていたために、通常自分では使わない「rime」を用いたと思われるのです。このようなことを必要以上に気にするのが慶谷先生でした。

⁵ 題の次に、「昭和49年12月2日（月）—7日（土）於東京都立大学」とある。